

徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

静岡産業大学情報学部 特任教授

中村羊一郎 氏

Yoichiro Nakamura



経歴

1943年(昭和18年)静岡市生まれ。東京教育大学文学部卒。静岡県史編さん室長、静岡市立商業高校長、静岡産業大学教授を経て2010年現職。おもな著書に「番茶と日本人」など。近年はマンマーの茶文化研究に力を入れている。

庶民社会に溶け込んだ神としての家康

家康の鷹狩り好きは半端ではなかった。鷹狩りは庶民の生活空間で行われる。これが庶民と親しく接したという家康伝説を生み出す背景となった。

あるとき、鷹狩りに行く途中、横田町で早朝から掃除をしている老人を見かけた。大いに感心した家康は老人に茶を所望した。老人が洪茶を献じると家康はすこぶる上機嫌で、「褒美をやるう、何が望みか」と言った。老人は、「家の前を往来する車が多く、埃がたつうえにうるさくて迷惑しているので、やめさせてほしい」と申し上げた。そこで家康はこの町での車の通行を禁じた。

家康は馬場町に住む的場源七と親しかった。鷹狩りに行った帰りに的場家に寄ると

き、暗くなってもすぐわかるように、同家には、一般に認められない破風を設けることを許したほどだった。広野の三浦家を訪れたときには、出された料理がおいしかったので味知(あじ)という別称を与え、庭の柿に接ぎ木をしていったという。好好爺然とした家康のふくよかな顔が浮かんできそうだ。

しかし、大好きな鷹狩りを阻害するようなことは断じて許さなかった。慶長十六年(一六二二)の十二月一日、府中近辺に鷹狩りに行ったところ、田に水がいっぱい溜まっていた。これでは自由に動き回れない。毎年、稲刈りが済んだら水を落として置くようにという命令が出されていたにもかかわらず、それを守っていないと怒った家康は、田の持ち



【築城図】(部分、名古屋市博物館蔵) 能登の旧家に伝来した六曲一隻の小型屏風。慶長時代の城づくり・町づくりが描かれていると推定されています。

主十数名を牢屋にぶちこませた(『駿府記』)。

これとは別に、大御所家康のイメージにそぐわない伝説もたくさんある。戦さに敗れた家康が上桶屋町に逃げてきて、たまたま作りかけだった桶の中に隠してもらって助かった。そこで桶屋に「何か望みがあれば申せ」と言うと、「仕事の後片づけが大変なので、片づけを御免除いただきたい」と答えた。以後、この町の桶屋は、よそで仕事をして帰る時、木端などをそのままにしておいてよいという特権を与えられたという。

三方が原合戦の大敗のせいで、遠州には家康が餅を食い逃げしそうになつてはあさんに追いかけられたとか、お金を借りて帰ったというような、ひどく情けない姿が語り伝えられている。命からがらの敗走という、家康の

私の一文字

中村羊一郎さんが選ぶ
徳川家康公を表現する一文字。

死後、神になったのは家康だけではないが、江戸時代の安定は、神としての絶対的な権威に裏づけられていた。

神

著書のご紹介



「家康からの贈りもの」
羽衣出版 1300円(税込)

中村羊一郎の静岡物語第1巻。民俗学の視点から郷土静岡をさまざまな角度から描いたエッセー。身近な話題が、思わぬ広い世界につながる楽しさがある。

権威を真つ向から否定する内容ばかりで、あの時代にこんな話を口にしていいのかわからない感じがする。だが、これらの話には決まった型がある。家康を助けた者が、何らかの特権を与えられたという筋になっているのだ。日本各地には、神様が苦しんでいたとき、それを助けた者に幸せが授けられたという伝説が広く分布している。家康の敗走伝説は、まさにこのパターンである。後の御神君、家康が窮地に陥るのは、神が庶民に接するための前提であり、助けたものに恩寵を授けたことで、権威とありがたみは長く語り継がれることになる。

神祖、権現様と呼ばれた家康は、弱みを見せた神と人間との関係を自らに巧みに重ね合わせることで、徳川の世を支え続けたのであった。